

モノと情報

竹の焼畑と稲作儀礼と神話～竹林文化論への試み～

川野 和昭(鹿児島県歴史資料センター黎明館学芸課長)

キーワード：成育促進儀礼、病気、治療、霊、鼠、雷、鶏、牛、生血、生肉、

調査期間・場所：2005年10月16日(日)～2005年11月11日(金)

ラオス人民共和国ルアンパバーン県、ウドムサイ県、ルアンナムター県

Bamboo and Rice: Cultural Dimension of Shifting Cultivation

Kawano Kazuaki(Kagoshima Prefectural Museum of Culture Reimeikan)

Keywords: Ritual for promoting rice growth, Diseased rice, Curing, Spirits, Mice, Thunder, Chicken, Cow, Blood, Flesh

要旨

この儀礼は、稲の病気を事前に防ぐ儀礼と、病気になった稲を治療する儀礼とに大別できる。鶏、犬、豚、牛などの動物が供犠され、黒白の色別、雌雄の別が強調される。稲に悪さを行う霊や直接害を与えている鼠を、供犠した動物の生血や調理した肉でもてなし、遠方へ立去らせ、再侵入を防ぐことで、稲の順調な生育を促し、豊作を願うところに目的がある。

1 はじめに～現地調査のねらい～

今回の調査は、ラオス北部ルアンパバーン及びウドムサイ、ルアンナムター地域を対象にして、そこに生きる人々と竹と関わり合いを探ることにあつた。具体的には、竹を重要視する焼畑に焦点を当て、対象とする森と竹、その竹の利用と竹細工の関係、竹の子と食、森の伐採、焼き、種蒔き、成育促進、雑草、収穫、焼米、森の再生過程等に関する伝統的技術およびそれに深く関わる儀礼や神話を聞き書きの手法で記述することであつた。

それは、これまで筆者がトカラ列島、大隅半島、九州森地で進めてきた「竹の焼畑」と比較するという意図が含まれているものであり、平成16年度の本研究プロジェクトの調査の延長として実施したものである。特に、竹の再生力を生かした持続可能な焼畑ということをはっきりとしようとするところにねらいがあつた。そして、それを支えている各民族、さらには集落単位が持つアイデンティティーを探るために、稲作神話と糯米の品種及び竹、さらに稲作儀礼との相互の関係についても聞き取りを深めてみた。また、筆者が従来試みてきた「焼畑その後」と呼ぶ、再生過程にある森の認識とその利用についても、前回の調査を深めることに努めた。また、過去2回の調査で欠落していた成育促進に関する儀礼の聞き書きに力点を置いた。それは、これらの問題がこれまでの焼畑の研究で見落とされてきた重要な問題であるという認識に基づいたものである。さらに、日本列島のなかで南九州や南西諸島という地域のローカルな問題だと思われがちな竹の焼畑が、アジアというグローバルな文化として浮かび上がってくることが期待されるからである。また、それはこれからの緑の地球の再生を考える上で、人と森との関わり方のアジア熱帯モンスーン地域からそのモデルを示すことにつながっていくという見通しも予感されるからである。本報告では、特に、成育促進に関する儀礼について、その中心となっている動物供犠に焦点を絞って述べるものとする。

2 成育促進に関する儀礼

(1) ルアンババーン県ナムパーク郡ホイジン村・カム族

儀式名 リッ・リアン・プロイ・ハレッ (儀式・食べさせる・霊・畑)

種播きした後、1ヶ月くらい経ち、稲が30%ほどに生長したところに行う。

知人と共に2~3人畑に行き、レック・チャモン・ハレッの時、女性が播いた3株の所に、ホー・ハレッ (霊の小屋・畑) を建てる。ホーハレッは、マイポン、マイサンという竹で作る。三角の空洞の竹編みの小屋を作り、それを竹の柱の頂上に取り付けたもので、柱の竹の節には下側から削り掛けが施される。

ホーハレッの前で赤い雄の鶏を殺し、生血をホーハレッに塗る。

殺した鶏をチョオ (作小屋) の囲炉裏で調理し、頭、肝臓、足、と御飯、ラオハイ (酒) を1杯をホーハレッに供え、「これらを差し上げますので、ここにいる霊は来て食べてください。稲に悪いことをしないように、稲が良く実るように、我々も病気にならないようにしてください。食べたなら畑の外に出て行ってください」と祈る。

鶏半分を、三株の稲の所に供えて、トク・マン・ゴ (糸を結ぶ・魂・稲) をする。早稲種、中間種・晩稲それぞれを白木綿の糸で結ぶ。

タレーを作り、鶏の生血を塗り、鶏の羽根を付けて、畑の道の出入り口に立てる。これは、悪い霊に食べさせたよという標で、悪い霊が再び畑に入らないようにするためである。

(2) ルアンババーン県ムンゴイ郡ダウン村・カム族

儀式名 プーア・ハレッ (治療・畑)

畑の稲が病気にならないように行う儀式で、病気になったときにも行う。

黒い雌の鶏1羽、木の葉4種類 (ト・トゥランマーン、ト・チュック、ト・クロット、ト・タンブリカルアン) を用意して、家から畑に持って行く。

木の葉4種類 (ト・トゥランマーン、ト・チュック、ト・クロット、ト・タンブリカルアン) は、鬱金の周りに差し立てる。

儀礼的に植えてある鬱金のところに、四角な竹の台を作り、その上に、米ぬか、煙草、屑米、白蟻に食べられた稲茎を乗せる。

持ってきた鶏の口を割き、台の上に注ぎながら次の言葉を唱えて、稲が病気にならずに、野生動物が来て稲を食べずにちゃんと育つように祈る。

プーア・ハレッ	プーア・ <u>バライ</u>	<u>パツカイ</u> ・ <u>マツ</u> ・ <u>プアー</u>	<u>マツ</u> ・ <u>オーンム</u>
	畷	持ち帰る 母 火	母 水
<u>アンルツ</u> ・ <u>ゴツ</u>	<u>コツ</u> ・ <u>チット</u>	ゴツ・アンルツ	<u>チャム</u> ・ <u>アン</u> ・ <u>ハーンム</u>
美しくさせる 稲	全くなくなる・草		蔓草 させる 死ぬ
<u>アム</u> ・ <u>アン</u> ・ <u>ア</u>		<u>クネ</u> ・ <u>クリン</u>	<u>スアンブン</u>
ない・させる・何も来ないように		鼠 鼠の種類	猪 虫
<u>ハーンム</u> ・ <u>ムン</u>	<u>ピンポア</u> ・ <u>クワアテン</u>	<u>ヤ</u> ・ <u>イヤル</u> ・ <u>ヒヤン</u>	
白蟻	料理する	料理する	〜と 鶏 黒米
<u>マ</u> ・ <u>マン</u>	<u>マ</u> ・ <u>ピー</u>	<u>マ</u> ・ <u>ハンカーンム</u>	<u>マ</u> ・ <u>ハンローイ</u>
食べる 生血	生もの	米糠	屑米
<u>アンルツ</u> ・ <u>ゴツ</u>	<u>アンゴツ</u> ・ <u>チット</u>		
	なくなる 草		

(3) ルアンババーン県ムンゴイ郡ハッカーム村・カム族)

儀礼名 プアー・ゴツ・トゥ・ニャン (治療・稲・当たられる・病気)

稲の葉が黄色になったり、萎れたりして病気になりそうなりそうになったとき、あるいは病気になってしまったときに行う儀礼である。

プレイマブック (大きな皮の厚い蜜柑) の木の皮とポットゴロイ (生姜) の皮を持って行く。「稲が病気にな

りました。これから元に戻り、良くなりますように、治療します」と唱えて、畑の中の木株のところに3～4カ所に置く。また、鬱金のところにも振りかける。さらに、鬱金の根元には、銅か亜鉛を埋める。

(4) ウドムサイ県ムンガー郡ノンタオ村カム族

儀礼名 リヤン・ロイ・ハレツ(食べさせる・霊・畑)

いつもやる儀礼ではなく、稲が成長して鼠にやられたり、虫にやられたり、葉が黄色くなって病気になるようになったときに行う儀礼である。

イヤルー・クロック(白い鶏)1羽と犬(雌雄、色は制限なし)を持って畑に行く。カートン(バナナの茎で作った30㍻四方、深さ10㍻の箱)の中に、鼠、猪、鶏、豚、霊の絵を描いた紙を入れる。さらに、ローソク4本、1個を四分割したゆで卵、米粉と精米した米をカートンの四隅に置く。その後、「今日は、白い鶏とか犬、卵、お米とかを食べさせますので、食べたなら畑の外に出ていってください」と唱えながら、家から持参した鶏と犬を引っぱって、畑の作小屋と畑の周囲を回る。畑の外にカートンを置き、そこで鶏と犬とを殺して、その生血を「今日は、白い鶏とか犬、卵、お米とかを食べさせますので、食べたなら畑の外に出ていってください」と唱えながら、カートンに塗り付ける。それから、鶏と犬を料理して、カートンにも少しずつお供えする。

霊は白い鶏と犬が好きで、黒い雌の鶏は受け取らないという。後はみんなで食べる。

(5) ウドムサイ県ムンガー郡ホワイレンム村・カム族

儀礼名 プアー・カネ(治療・鼠)

カム暦7、8月、稲が25～30㍻に育って草を取ったりする頃、鼠にやられたら行う儀礼である。ローイ(山の霊)に対して鼠が出ないようにというお願いをする儀礼である。

カートン(バナナの茎で作った30㍻四方、深さ10㍻の箱)を用意して、その中に煙草、トウモロコシ、胡瓜、御飯、米粉(品種は何でもよい)と、犬、山羊、ヌア(蛇)、野生の鶏の絵を描いた紙を入れる。さらに、竹筒に入れたラオハイ(米粉の発酵酒)、2羽の白い雄の鶏とを一緒に畑に持っていく。

畑に着いたら、畑に入る道の入口に、ローイも人も入らないようにタレオを立てる。その時に「誰かがやってきたとき、お前の目とタレオの目と同じだったら畑に入ってもよいが、目が違っていたら入ってはならない。貧乏な人は入ってはならない。水牛や牛を引っぱってきた人は入ってもよい」と唱えながらタレオを立てる。ローイはタレオの目を恐がる。

村に通じている道の畑の入口の手前にカートンや竹筒に入れたラオハイを置き、2羽の白い雄の鶏を殺して、その生血をカートンに塗りながら「稲が鼠にやられました。これから煙草、トウモロコシ、胡瓜、御飯、米粉、犬、山羊、ヌア(蛇)、野生の鶏、ラオハイ、2羽の白い雄の鶏を食べさせますので、鼠が稲を食べないようにしてください」と、ローイにお願いします。

鶏は料理してカートンにも少しずつお供えする。後はみんなで食べる。その日は畑の中に入ってはならない。

(6) ウドムサイ県ムンガー郡ホイリアン村カム族

儀礼名 リアン・カネ(食べさせる・鼠)

稲が鼠にやられたときに行う儀礼である。行う場所は、共同して畑作業を行っている何家族かの畑に通ずる道の村に一番近い分岐点のところである。カートン(バナナの茎あるいは竹で作った60㍻四方、深さ15㍻の箱)を全体で用意する。一緒に行う家族は、黒い鶏(雌雄は無関係)とラオハイ2～3、クワイネ(小さな竹籠)を用意する。

それらを持って分岐点まで行き、そこに高さ1㍻ぐらいの4本足の台を作り、その上にカートンを置く。

各家族は、クワイネを持って自分たちの畑に行って、稲、トウモロコシ、茄子、唐辛子などをクワイネいっぱいにとってくる。みな揃ったら儀礼を始める。各人のクワイネをカートンに入れる。さらに、人間(鼠を遠くに案内する人)と鼠を描いた紙をカートンに入れる。ラオハイを細い竹筒2本に入れてカートンに供える。鶏は、南瓜の葉などと一緒にスープにして少しカートンに供える。

トーケイ(男の長老4人)がカートンの前に並んで、「鼠に畑にできたものを全部を食べさせます。鶏、ラオハ

イも一緒に食べさせます。どこか遠くへ行ってください。この辺りには罾を仕掛けます。それに掛かってしまうのでどこか遠くのいいところに行ってください。川や支流には行かないでください。ここにいると罾に掛かってしまうので」と唱える。

その後は、みんなで料理を食べたり、ラオハイを飲んだりして過ごす。その日は畑に入ってはならない。

(7) ウドムサイ県ムンサイ郡パクメン村カム族

儀礼名 リアン・ロイ・ハレツ（食べさせる・霊・畑）

カム暦7月、稲が膝の高さになり草を取る頃、稲がねずみにやられた時に行う儀礼である。

儀礼名 リアン・ロイ・カネ（食べさせる・霊・鼠）

カム暦9月、稲の穂が垂れた頃、稲がねずみにやられた時に行う儀礼である。

白色以外の色の鶏（白い色は霊が食べない）1羽（畑が広いときは雄の鶏、広くなかったら雌でもよい）を畑に持って行く。畑の作小屋の近くで行う。カテーまたはカートンという竹（部材はマイボン）の籠を作り、4本足の台の上に乗せる。カートンの中には、粳、精米した米、米糠、トウモロコシを供える。また、土で作った鼠の人形もカートンの中に入れる。

持ってきた鶏を殺してその生血をカートンに掛けながら、「これは鶏の生血だ。これからこの生血を食べさせる。だから稲を食べないで、どこか遠くへ行ってください。稲がたくさんできるようにしてください」と唱える。

その後、鶏を料理して、チュアン（足）、タロン（肝臓）、ガドゥン（胃）、カンボン（頭）、パヌルー（羽根）を2切れずつ長で巻いたものをカートンに供えながら、「ロイ・カネにあなたに先に食べさせます。私たちはあなたが食べた後で食べます。私たちは後で食べます。先に食べたあなたはお腹いっぱい。後に食べた私たちはまだお腹いっぱいになりになりません。お腹いっぱいになったあなたは、どこか遠くへ行ってください。私たちの稲を破壊しないように遠くへ行ってください。私たちの稲が良く育って、収穫がたくさんになるようにしてください」と唱える。

その後で、人間が食べる。最後に、畑に入る道の入り口の外側にタレオを立てながら、「タレオを立てます。いろいろな悪い霊は入らないでください」と唱える。タレオを立てたらその日は畑に入ってはならない。

(8) ウドムサイ県ムンサイ郡ナムレーン村カム族

儀礼名 プア・ロイ・ムアン（行う・霊・村及び畑を含むエリア）

この儀礼は、稲が膝の高さぐらいになった7月頃、村全体で行う儀礼で、モック・ロイ・ムアン（高い・霊・村及び畑を含むエリア）という、大きな椎の木が2本以上立っている高い山の上で、稲の成長と豊かな実りを行う儀礼である。儀礼を司るトーケー・ヨー・リアン・ロイ・ムアン（長老・行く・食べさせる・霊・村及び畑を含むエリア）は隣村から頼んでくる。

村人は、村全体で牛1頭、各家々ではラオハイ（粳の発酵酒）1壺、ラオラオ（粳の蒸留酒：焼酎）1本、畑の稲株を1株を持ってモック・ロイ・ムアンに行く。椎の木の根元に、タラー（マイホック）やタラー（マイヒヤ）という竹でテ（高さ20釐、40センチ四方の台）を作る。テの上に長さ2釐ぐらいの1本の竹か木の棒を乗せ、両端に新しい服とか、ネックレスなどの飾り物、お金を吊して飾る。さらに、テの上に各家々の稲株1株ずつ、ヤ（煙草）、クンロップリッ（ピンローズ）を供える。

次に、牛の首をナイフで切って殺す。生血、肉、内臓を焼いたり、スープにしたりして、タラーで茶碗を作り、料理を少しずつ盛って、テの上に供えてロイ・ムアンに食べさせる。

その時に、トーケー・ヨー・リアン・ロイ・ムアンは「これからロイ・ムアンを行います。牛を殺して食べさせます。このロイ・ムアンは、虫、鼠、リスを作って畑の稲を食べさせないようにしてください。我々の稲がきれいになりますように、たくさん収穫がありますようにしてください。我々の村が豊になりますようにしてください」と唱える。ロイ・ムアンに食べさせた後、トーケー・ヨー・リアン・ロイ・ムアンが食べ、その後村人が食べて、ラオハイ、ラオラオを飲んで過ごす。儀礼が終わって村に帰ってもその日は村から外に出はならない。翌日はかまわない。

毎年牛を殺すのではなく、翌年は黒い犬を殺す儀礼（ハルン）を行い、3～5年目は行わずに6年目に再び牛

を殺すプア・ロイ・ムアンを行う。

儀礼名 ハルン

プア・ロイ・ムアンを行った翌年、同じ目的で行う黒い犬を供犠する儀礼で、トーケー・ヨー・リアン・ロイ・ムアンは村の長老が務める。

この儀礼では、供える台はテではなく、タネックの竹の先を割って逆笠状に広げた形のトゥングロンを作り、その上に四角に割り竹を置き、その4隅からカニック（竹の輪を連ねたもの）を吊り下げ、その先端にカ（竹で編んだ魚の模型）とジュンタ（竹で編んだ蝦の模型）を下げる。稲は、魚とか海老を見ると水のように思って涼しい気分になるから下げるのだという。トゥングロンの中には、各家々の稲株1株ずつ、ヤ（煙草）、クンロップリッ（ピンローズ）を供える。

次に、黒い犬（白い犬は禁止である）は、首を切って殺す。生血、肉、内臓を焼いたり、スープにしたりして、少しずつトゥングロンの中に供えてロイ・ムアンに食べさせる。

その時に、トーケー・ヨー・リアン・ロイ・ムアンは「これからロイ・ムアンを行います。犬を殺して食べさせます。このロイ・ムアンは、虫、鼠、リスを作って畑の稲を食べさせないようにしてください。我々の稲がきれいになりますように、たくさん収穫がありますようにしてください。我々の村が豊になりますようにしてください」と唱える。ロイ・ムアンに食べさせた後、トーケー・ヨー・リアン・ロイ・ムアンが食べ、その後村人が食べて、ラオハイ、ラオラオを飲んで過ごす。儀礼が終わって村に帰ってもその日は村から外に出るはならない。翌日はかまわない。

(9) ウドムサイ県ムンフン郡プーラット村：旧ナムコンム村カム族

促進儀礼はない。

(10) ルアンナムター県ナーレー郡サルーン村ラメット族

稲が白蟻にやられて病気になったときに、病気が治って稲が良く育って実るように、マイヒヤの末の折れた竹を、種蒔きの時儀礼的に植えた鬱金のところに立てて祈る。

(11) ルアンナムター県ナーレー郡トントーン村カム族

儀礼名 ラックターン（水掛け）

種蒔きから1ヶ月ぐらい経った頃、稲の成長を促進するために行う儀礼である。

川から取ってきた小石と水を入れた竹筒、タレオ2本、鶏（雌雄、色は無関係）1羽を持って畑に行く。種蒔きの時儀礼的に植えた鬱金のところにタレオ2本を置く。その上側で鶏の口を刀で割いて、その生血をタレオに塗って、その後鶏を叩き殺して、羽根の毛をタレオに刺す。鶏を調理する。「ラックターンの儀礼をやります。畑にいるロイ（霊）たちはここに集まってきて食べてください。悪いことをしないでどこか外へ出て行ってください」と唱えながら、調理した鶏の胃袋、肝臓、頭の肉を少しずつタレオに付ける。

最後に、稲の魂に対して「この水と小石のように、畑に水分があって涼しくなって、稲がきれいに育つようにしてください」と祈りながら、鬱金とその周辺に竹筒の水を掛け回す。

帰るときに、畑の上側の出入り口（森へ通じる出入り口）にタレオを立て、次に畑の下側の出入り口（村へ通じる出入り口）にタレオを立てて、畑を出る。

(12) ルアンナムター県ナーレー郡サムソン村カム族

儀礼名 ラマン・ゴッ（魂・稲）

稲が実る前、まだ朶が青い頃にやる、稲の収穫が多くなるように、家の男主人が執り行う儀礼である。

作小屋の近くに、チョッ（マイボンの竹）を1本（儀礼を行う人によって本数は変わり、多い人は12本立てることもある）を立てる。これには、各節ごとにポッチョ（削り掛け）を施し、その先端からシュローイ（竹の輪を連ねたもの）を下げ、その先端にシン（鳥）、カ（魚）、ホイ（蝉）の竹で編んだ模型を付ける。

チョッの根元に円形の食台を置き、その周りを竹串の柵で取り囲む。食台の上に卵、花、ピンローズ、お金（コ

イン)を供える。チョットの根元で豚を殺して、その生血をチョットの根元に掛けながら「ここで豚1頭を殺して、お供えしました。ここにいるラマン(稲の魂)たちは、ここに来て食べてください。食べたなら稲をきれいに実らせてください」と唱える。

豚を調理したら、肝臓、肺、頭、尻尾、後足1本(これだけは生のまま)を、先と同じ言葉を唱えながら食台の上にお供えする。

その後、みんなで豚の料理を食べる。

(13) ルアンナムター県ナムター郡チャルンスツ村カムクエン族

儀礼名 ハムアン

9月頃、行う。同じ山に畑を拓いた数家族単位で行う。家々が集まり相談して、儀礼を行う畑を選定し、選定された人の家が焼いた曜日(カムクエンの一週間は、カップ、ラップ、ラワイ、ムン、プロツ、カット、コット、ルオン、タウ、カーの10日間からなっている)に行く。畑を燃やすとき、鼠や飛蝗、蛇などを焼き殺したので、それらがピサエプー・ピサエー(死んだ虫たちの霊)になって稲を病気にさせたり悪い影響を与えないように、ハフンルを行う前に行う儀礼である。

家から黒い犬(雌雄無関係)1匹、黒い鶏(雌)1羽を持って選定された人の家の畑に行く。、白い色の犬、鶏はだめである。儀礼を行う場所は、播種儀礼で一番最初に種蒔きをしたルンクツの場所である。そこに竹で四角の台を作り、タレオを1本立てる。台の上にはタバコとプレプルー(ピンローズ)を供える。それから犬と鶏を叩き殺して、その生血を台とタレオに塗り、タレオは台の横に立てる。その時、ピサエプー・ピサエーに向かって、「ここまでできました。悪い霊、あなた達が悪いことをしないので食べに来てください。稲に悪い影響を与えないでください」とお願いをする。また、各家々が持ってきたタレオにも塗り、それぞれの畑のルンクツの所に立てて、同じようをお願いをする。その後、村に一番近い道の分岐点の所に、パノンゴツ(高さ2丈、幅2丈の門)を立てる。門の脇にも竹の台を作る。殺した犬と鶏を料理をして、犬は、頭、足、肺、肝臓を、鶏は頭、足、羽根、肝臓、胃袋を少しずつ台の上に供える。供えながら、ピサエプー・ピサエーに向かって、「今日は儀礼をやりませう。鶏を食べさせませう。食べに来てください。食べてから稲を病気にさせないように、畑を出てどこかに行ってください」と唱える。

その後、みんなで食べたり飲んだりして、最後に鳥の羽2、3本を刺したタレオを立てて帰る。料理は食べ尽くして帰るもので、村に持ち帰ってはならない。儀礼を行った日とその翌日は、畑に入ってはならない。もし、誰かが誤って入ったら、儀礼に要した費用の2倍の罰金を払わされ、改めて儀礼をやり直す。3日目からは入ってよい。

儀礼名 ハフンル

ハムアンを行った後、畑を燃やすとき、鼠や飛蝗、蛇などを焼き殺したので、それらがピサエプー・ピサエー(死んだ虫たちの霊)となって稲を病気にさせたり悪い影響を与えないように、各個人の家単位で行う儀礼である。ハムアンを行ったらハフンルは行わなくてもよいことになるが、各家々ではそれでもやはり行う。

家から黒い鶏(雌)1羽を持って畑に行く白い色の鶏はだめである。儀礼を行う場所は、播種儀礼で一番最初に種蒔きをしたルンクツの場所である。そこに竹で四角の台を作り、タレオを1本立てる。台の上にはタバコとプレプルー(ピンローズ)を供える。それから鶏の口を割いて、その生血を台やタレオに塗り、その後鶏を棒で叩き殺し、チャオハレツ(畑の小屋)で料理をして、頭、足、羽根、肝臓、胃袋を少しずつ台の上に供える。供えながら、ピサエプー・ピサエーに向かって、「今日は儀礼をやりませう。鶏を食べさせませう。食べに来てください。食べてから稲を病気にさせないように、私の畑をでてどこかに行ってください」と唱える。

その後、みんなで食べたり飲んだりして、最後に鳥の羽2、3本を刺したタレオを各畑(何枚か拓いている場合)の入り口に立てて畑を出る儀礼を行った日とその翌日は、畑に入ってはならない。3日目からは入ってよい。

(14) ルアンナムター県ムンシン郡ウーラマイ村アカ族)

儀礼名 ヤ・チャチャ(畑・料理を作る)

西暦の8月中旬頃、稲が30日前後に伸びたころ、稲が病気にならないで、収穫がよくなるように祈る儀礼で

ある。

白色以外の色の鶏2羽（雌雄は関係ない）を畑に持って行く。どうしても白以外の鶏が2羽そろわない場合は仕方がないが、2羽ともに白い色だと霊が食べないので、1羽は必ず白色以外の色の鶏を選ぶ。

儀礼は、ヤチュン（作小屋）の上側で行う。まず、ジェークーという4本足の竹の台を作り、ネ（霊）がジェークーに上がるためのドゥス・ン（9段の階段）を架ける。ジェークーの上には、チャホーン（竹で作った円い器）に土を入れて乗せる。ジェークーの右脇には、シジョ（竹の柱）を立て、ジバジシー（細い竹の筒）を結わえ付け、その中にチト（細い竹の棒）を入れる。その根元にはウトトン（水入れ容器）に匙を入れて置く。

まず、ウトトンの水を匙で掬ってジバジシーに3回入れる。次に、ウトトンの水を2羽の鶏の足、肩（羽根の付け根の背中）頭に3回ずつ掛ける。それから、2羽の鶏を棒で叩き殺して、足と肩、頭の毛を3回ずつチャホーンの中に入れる。ヤチュンに戻って、作っておいた4本のタレオにそれぞれ6枚ずつ羽根の毛を刺す。その後、鶏を料理する。

次に、竹の茶碗3箇を作り、1個には料理した鶏のそれぞれの足1本、羽根1つ、肝臓1切れ、頭1つずつを入れる。別の1個にはジバ（水）を、もう1個にはロポ（お茶）を入れる。別に、ホーショ（バナナの葉に御飯を乗せたもの）を作り、それらをジェークーのところに持ってくる。

ジェークーの4隅にソンレツ（ローソク）を立てて火を灯し、次の言葉を唱えてネを呼ぶ。「山や畑にいるネたちよ、ヤチャチャを行います。食べに来てください。食べたらお前がいつもいるところに帰ってください。そして、私たちの稲が病気がなくなりきれいになって、収穫がたくさんあるようにしてください」と唱えながら、ホーショを少しずつ3回、竹の茶碗に入っている鶏の各部位を少しずつ3回、ジバを3回、ロポを3回ずつ、チャホーンの中に入れる。

終わったら、ヤチュンに帰って鶏の料理を食べながら昼食を取る。

村に戻ってくる前に、畑の上側、右側、左側の入口の外側に、鶏の羽根の毛を刺して、さらにその上に周りの草を取って刺して、その面を外側に向けて立てる。最後に、村に通じる道の下側の入口に同じようにタレオを立てる。畑に入ろうとやってきたネは、これを見て「この畑では、鶏を殺して儀礼をしたのだな」ということを理解して、畑には入らないのだという。

儀礼名 ヤ・ハダ（畑・雷）

ヤ・チャチャを行っても稲に病気が出たときに行う儀礼である。この儀礼を行う理由は、ヤ・チャチャを行っても稲に病気になるのは、燃えずに立ったまま残っている1番高い木に雷が落ちて、その火が畑に広がって稲に悪さをしたのが原因であるからである。準備するものは、ヤ・チャチャとほぼ同じであるが、大きく異なるのは、準備するものが白い雄の鶏1羽、ダボ（高さ170㍎の穂先と枝葉の付いた竹：種類はモベ：マイラン）を準備することと、儀礼をする場所が燃えずに立ったまま残っている1番高い木の根元ということである。

木の根元にジェークーを作り、ダボの根元側に5つ、その上側に4つの削り掛けを作り、そこに鶏の羽根の毛1本ずつ挟んで立てる。ダボの先端から赤、白、緑の三色の木綿糸を垂らし、その糸の先端にフシ（寶貝）を結んでジェークーの上に置いてあるチャホーンの中に入れる。その後、ヤ・チャチャと同じようにして祭り、その最後に、バナナの茎1枚をジェークーの上に置き、それに木の枝に着けた火を近づけて、「ここには雷が落ちたでしょう。その雷の火が広がって悪さをし、稲が病気になってしまいました。これからその火を消します」と唱えて、バナナの茎に近づけた火に水をその火を掛けて消す。そして、「稲の病気がなくなり、きれいに実って収穫がたくさんありますように」と祈る。タレオはしない。

(15) ルアンナムター県ムンシン郡ヤールー村アカ族

儀礼名 ヤ・チャチャ（畑・霊にお供えする、食べさせる）

稲が30㍎前後に伸びたころに行う儀礼で、その畑にした森が誰かが死んだときにお棺の材木を伐りだした切り株が残っていることが心配されるときや、種蒔きしたときに鼠や鳥が掘り返して種籾を食べた跡が見られたとき、芽が出たとき飛蝗が食べた後が見られたときは、稲が病気になる恐れがあるので行う。また、稲が病気になったときに治療をするためにも行う。

畑に雄雌各1羽（白い鶏1羽、その他の色の鶏1羽）とチパ（焼酎）、ロポ（お茶）、ホチャ（糯米のお粥）を持っ

て行く。鶏が2羽いないときは白い鶏と卵でよいが、白い鶏が雄の場合は「この卵は雌である」と、雌の場合は「この卵は雄である」と唱える。

儀礼を行う場所は、ホペション（聖なる畑の片葺きの小屋）とは別の作小屋の近くの上側でも横でもよい。ドゥホー（土地が窪んでいるところ）を掃除する。作小屋で火を起こして、まだ飲んでいない水を、2羽の鶏の足、羽根、頭にそれぞれ1回掛ける。そして、頭を叩いて殺す。これは、霊に食べさせるので足、羽根の毛、頭にいる霊は人間の目に見えないし、霊が食べないので、この水で洗い流してきれいにする。そのために水を掛ける。

ドゥホーの4隅に羽根の毛を1本ずつ差し立てる。作小屋で料理を作り、足、羽根、肝臓、頭の肉を少しずつ竹筒に入れて、チパ、ロボ、ホチャとともにドゥホーの中に供えながら、「ここに霊がいました。種蒔きしたときに鼠や鳥が掘り返して種物を食べたり、芽が出たとき飛蝗が食べるということがありましたので、稲が病気になるかも知れません。あなた達には鶏を2羽食べさせるので、ここからどこかへ行ってください。そして稲がよく育って、収穫がたくさんありますように」と唱えて、霊に食べさせる。最後に、畑の出入り口の外側に鶏の羽根を刺したタレオを立てる。タレオは鳥の羽を挿した面を外側に向けて立てる。これは、外から畑に入ろうとする虫とか霊とかがこれを見て、儀礼がしてあるということを知り、畑に入らないからである。

儀礼名 ヤ・ロロ（畑・食べさせる、お供えする）

9月頃、稲が孕む前、30匁～40匁ぐらいにきれいに育った頃に、霊が稲に悪さをしないでもっときれいに育つように行う儀礼である。

家でカロー（六つ目編みの鶏入れ籠）を作り、リトゥー（鶏を叩き殺すための長さ40匁ぐらいの棒）を挿す。さらに、ヤヌンと呼ぶ雄の鶏1羽、ヤチャと呼ぶ白色でない雌の鶏2羽、呼び名はないがポペション（片葺きの小屋）のところで行うホピー・チュ・カ（ポペションのところに霊・供える・入れる）という儀礼に用いる雌の鶏1羽合計4羽の鶏を準備する。ヤヌンかホピー・チュ・カに用いる鶏の内どちらか1羽は、かならず白い鶏でなければならない。また、タマゴ2個を準備する。カローの中に、ヤヌン1羽と白色でない雌の鶏1羽を入れて畑に持って行く。

畑に着いたら、カローの入口を西の方角に向けて、ポペションの後ろ側に立てる。2羽の鶏を外に出して、ヤヌンの尾羽に火を着ける。これは、その臭いを広らせて、これから儀礼を始めることを霊に知らせて、集まってもらうために行うものである。次に、4羽の鶏の足、羽根の付け根、頭に、誰も口を付けていないきれいな水を1回ずつ掛けて、リトゥーでヤヌンを最初に叩き殺し、生血はカローに塗って霊たちに鶏を殺したことを告げる。続けて雌3羽を叩き殺す。鶏は作小屋に持って行って料理を作る。

次に、ヤチャの儀礼を行う。作小屋の近くにジェクーという4角の竹の台を作り、9段の階段を掛ける。その4隅にチョンレ（ローソク）を立てて灯を灯す。ルチュという竹の曲げ物の器に、土と白、赤、緑の三色の布（霊の着物）、シュワ（鍋のかげら：霊の奥さんたちに上げるお金）を入れて、ジェクーの上に乗せる。ヤチャ2羽分の料理を持ってきて、足1つ、羽根1つ、肝臓1つ、頭一つずつを、チパ（焼酎）、ロボ（お茶）、ホチェ（糯米のお粥）と一緒にジェクーの上に供える。

続けてホピー・チュ・カという儀礼を行う。残りの雌1羽の料理をホペションのところに持って行く。近くの地面をきれいに掃除をして、4隅に羽根毛を1本ずつ立てる。

足1つ、羽根1つ、肝臓1つ、頭一つずつと、チパ（焼酎）、ロボ（お茶）、ホチェ（糯米のお粥）、ゆで卵2個を、それぞれ器に盛って中に供える。そのうちゆで卵1個の少しをホピー（ホペションの霊）に、もう1個のゆで卵の少しをザブルマ・ネ（白蟻の塚・霊）に供えて食べさせる。その時、「山や畑にいる霊たちよ、今日はヤチャをやります。ここにきてください。そして、お供え物を食べてください。食べたらどこか遠くに行ってください。我々の稲が順調に育って、たくさん収穫があるようにしてください」と唱えながら供える。

その後、作小屋でみんなで料理を食べる。特に、ゆで卵は長老が食べるもので、青年は食べてはいけない。青年が食べると、お腹が大きくなって病気になるという。長老は直ぐに死ぬから食べてもよい。また、ヤヌンは作小屋では食べずに家に持って帰って家族で食べる。

畑への出入口の外側に鶏の羽根毛を挿したタレオを立てる。最後に村へ帰る出口にタレオを立てる。

種を播いて2ヶ月経ち、稲の丈が膝の高さぐらいになったころ、閉めてある竹の一方向を開いて、家から持ってきたガイ・メイ・ウーン・カオ（鶏・雌・抱く・稲）と呼ぶ、家族で育てた内のよく卵を産み、よく雛を育てる鶏（毎年同じ鶏）と、パーシュウ、パークンという魚2匹をホンの中に生きたまま供える。この鶏と魚を供えるのには次のような伝承がある。昔、タイルーは米作りはしていなかった。パーマイ・ヒーマパーン（森・豊かな野性）という山の中に直径が7拳の粒の大きな稲の穂があって、収穫の時期になると、ラオカオ（米倉）をきれいに掃除して鐘をポーンと叩くと、籾が飛んできて独りでにいっばいになるものであった。ところが、あるとき、主人を亡くしたメーマイというおばさんが、ラオカオを作り直していた。ところが、1人での作業であるため手間取り、完成しないうちに手に持っていた棒が鐘に触れてしまった。他の家のラオカオは籾を迎える準備が終わっていたのでいっばいになった。しかし、おばさんのラオカオは準備が終わっていなかったため、飛んできた籾は外に溜まっていた。おばさんは、悔しさの余り怒って棒でその籾を叩いたところ、現在のように小さな粒に割れて、村の全部の籾が川や森に飛んでいってしまった。森に逃げた籾はカイパー（野鶏）が保管した。また、川に逃げた籾はパシュウという種類のナンタロタラーンという名前の雌の魚が、ナン・クワ・ソツ（～さん・お手伝い・ソツ）と命名して保管した。それ以後10万年間、タイルーは籾がなくなってしまった。ところが、10万年後、あるお金持ちの女性が、ヒーン（三角網）を持って川に魚取りに行ったところ、パークンという種類の雄の魚を捕まえた。彼はパシュウという種類の魚のナンタロタラーンの恋人であったので、パシュウは「恋人を捕られたら困るのでパークンを助けてください。その代わりに、稲を差し上げますのでパークンを返してください」とお願いをした。女性がパークンを返すと稲をくれた。その時からタイルーは再び稲を手に入れ、稲作りを始めることができた。だから、ホンカオヘツの儀式にガイ・メイ・ウーン・カオとパークン、パシュウの2匹の魚を供える。

さらに、家の女性の使っている首飾りや髪飾り、スカートなどをホンに掛け、その上に傘を掛ける。

次に、ホンを支えている竹の柱と作小屋とを、白い木綿糸でつないで、僧侶を頼んで米の魂が集まってくるように、詞を唱えて祈ってもらう。

僧侶の祈りが終わると、魚掬い用の三角網を持って、畑全体を掬いながらその人が畑の中のもののできれいだと思う石やその他のものを入れて、ホンを支えている竹の柱の足下に置く。

その後、パーシュウ、パークンの2匹の魚を川に帰してやる。

最後に、開けた入り口の竹を閉じる。

(17) ウドムサイ県ムンガー郡ティーン村タイルー族)

儀礼名 バツ・ハイ（霊とかにお願いする・畑）

稲が鼠にやられたとき、タヘツのところに御飯、お菓子など甘いもの、お花とお茶を供え、ローソクに火を着け、ラダー（天使）というものに対して、鼠を除けてくださいとお願いする。

3 若干の考察

(1) 成育促進に関する儀礼について

儀礼を行う理由

この儀礼は、大きく二つの理由によって行われていることがわかる。つまり、第一番目は稲が病気にならないように防災的な儀礼として事前に行い、第二番目は、虫・獣害を含めて病気になった稲の治療として事後に行うということである。

たとえば、第一番目の例は、2 (10) (11) (12) (13) などのルアンナムター県ナーレー郡のター側沿いにすむカム族に顕著に見られる。さらに、2 (1) のルアンパバーン県ムンゴイ郡のウー川流域に住むカム族や、2 (16) のルアンパバーン県ナムパーク郡のガー川流域に住むタイルー族などである。

また、第二番目の例は、2 (3) (4) (5) (6) (7) などのウドムサイ県ムンガー、ムンサイ郡のガー川上流にすむカム族の間に顕著に認められる。その他、ルアンナムター県ナーレー郡のター側沿いにすむラメツト族やウドムサイ県ムンガー郡のガー川上流にすむタイルー族にも認められる。

さらに、第一番目と第二番目とを重複して行っている例も認められる。たとえば、2 (2)(3)のルアンパバーン県ムンゴイ郡のウー川流域に住むカム族や、2 (8)のウドムサイ県ムンサイ郡のカム族である。特に、2 (14)(15)のルアンナムター県ムンシン郡に住むアカ族は、明確な意識を持って実修していることがわかる。

儀礼の場所

儀礼が執行される場所は、播種儀礼のときに設けられた聖なる畑、畑の中に作られた作小屋（収穫作業の段階で畑の米倉として用いられる）の周囲、畑の入り口、聖なる森などで行われていることがわかる。

たとえば、播種儀礼のときに設けられた聖なる畑で行うのは、2 (1)(2)(3)などのルアンパバーン県ムンゴイ郡のウー川流域に住むカム族やウドムサイ県ムンガー郡のガー川上流にすむカム族、2 (10)のルアンナムター県ナーレー郡のター側沿いにすむラメット族、2 (16)(17)のウドムサイ県ムンゴイ郡からルアンパバーン県ナンパーク郡を流れるガー川沿いに住むタイルー族の間に見られる。これらの場所は、そこに播かれた稲が畑全体の稲を代表しており、収穫儀礼の中でも最初に儀礼的に収穫され、その稲穂が供えられる場所ともなるところであり、稲の収穫と深く関わる象徴的な場所である。特にカム族の場合は、播種儀礼の際にその場所に植えられた鬱金は、毎年毎年継承されて植え継がれていくもので、稲（の魂）を守る存在である。そうした場所が儀礼の場として選択されるのは、場所が持つ象徴性と深い関わりを持つものであると考えられる。

また、畑の中に作られた作小屋の付近で行われているのは、2 (4)(7)などのウドムサイ県ムンガー、ムンサイ郡のガー川上流にすむカム族や、2 (14)(15)のルアンナムター県ムンシン郡に住むアカ族、2 (12)のルアンナムター県ナーレー郡のター側沿いにすむカム族などである。この作小屋は、農作業の際の休憩や宿泊の施設として用いられるが、収穫時には畑の米倉となり、稲の魂が集合する空間となるべきものである。そうした意味において、稔りの象徴性を持つ施設であり、空間である。この場所が選択される理由もまたそこに求められるのである。

そうした中で、2 (15)のルアンナムター県ムンシン郡に住むアカ族は、第1回目に行うヤ・チャチャの儀礼においては作小屋の近くを選択し、第2回目に行うヤ・ロクの儀礼においては聖なる畑から作小屋そして聖なる畑へと三段階を踏んでいることがわかる。いずれにしても聖なる畑と畑の米倉たるべき作小屋が選択されていることは、この儀礼にとってその場所と施設を重要視していることは間違いないのである。

さらに、畑の入り口を選択する例は、2 (5)(6)などのウドムサイ県ムンガー郡のガー川上流にすむカム族と2 (13)のルアンナムター県ナムター郡チャルスツ村のカムクエン族などに見られる。特に、2 (13)の場合は集団で行うハムアンと各家族単位で行うハフンルとが見られることが注目される。

また、聖なる森で行われている例は、2 (8)のウドムサイ県ムンサイ郡ナムレーン村のカム族の例が見られる。この事例の場合は、畑とは離れた場所が選ばれているが、儀礼実修の場に各家々の畑から稲株1株が持ち寄られ、その成長と稔りと祈願する形が執られていることになる。

供犠の対象とされる動物と色と雌雄

畑地の選定儀礼や播種儀礼、収穫儀礼など一連の稲作儀礼は、動物供犠を伴うのが常であるが、この儀礼もまた動物供犠を伴っているのが特徴である。供犠される動物は、鶏、犬、豚、牛などがあげられる。また、絵に描かれたりする例まで含めれば山羊、野生の鶏、蛇などもあげられる。特に、鶏と犬、豚などの動物については、黒白の色別、雌雄の別が強調されるのが特徴である。

まず、鶏の例から見てみる。黒い雌の鶏を供犠の対象としているのは、2 (2)のルアンパバーン県ムンゴイ郡のウー川流域に住むカム族と、2 (13)のルアンナムター県ナムター郡チャルスツ村のカムクエン族である。

2番目に、黒い鶏であれば雌雄を問わないのが、2 (6)のウドムサイ県ムンガー郡のガー川上流にすむカム族である。

3番目に、赤い雄の鶏を供犠の対象としているのは、2 (1)のルアンパバーン県ナムパーク郡のガー川流域に住むカム族である。この場合、赤色は黒という色とそれほど遠くない関係にあると見なしてもいいと思われる。

4番目に、白以外の色の雄の鶏を供犠の対象としているのは、2 (7)のウドムサイ県ムンサイ郡のガー川上流にすむカム族である。しかも、「白い色は霊が食べない」という明確な白色の忌避の意識が見られる。また、

畑の面積が広い場合で、狭い場合は雌でもよいとしているが、そこには雄を優先する意識が見て取れる。また、2 (15)のルアンナムター県ムンシン郡に住むアカ族は、ヤ・ヌンで用いる鶏は、白以外の場合（白が選択される場合もあるが）も必ず雄でなければならないといい、雄という意識が強く働いている。

5番目に、白以外の色の雌の鶏を供犠の対象としているのは、2 (15)のルアンナムター県ムンシン郡に住むアカ族で、ヤ・チャチャの儀礼で山や畑にいるネ（霊）に供えるときに白以外の色の雌の鶏を選択している。また、ヤ・ロロの儀礼の中のホピー・チュ・カでも、白以外の場合（白が選択される場合もあるが）は雌でなければならないとし、雌でなければならないという意識が強く働いている。

6番目に、白以外の色で雌雄を問わない鶏を供犠の対象としているのは、2 (14)のルアンナムター県ムンシン郡に住むアカ族である。特に、ヤ・チャチャの儀礼では、雌雄は関係なく、白色以外の色の鶏2羽を畑に持って行くが、どうしても白以外の鶏が2羽そろわない場合は仕方がないので、1羽は必ず白色以外の色の鶏を選ぶ。それは、「2羽ともに白い色だと霊が食べない」からであるといい、強い白色忌避の意識が見て取れる。

7番目に、白い雄の鶏を供犠の対象としているのは、2 (4)のウドムサイ県ムンガー郡のガー川上流にすむカム族の場合は、黒い雌の鶏と霊が受け取らないといい、白い雄はしているが雌雄は不明である。2 (5)のウドムサイ県ムンガー郡のガー川上流にすむカム族で、この場合は紙に描いた犬、山羊、ヌア（蛇）、野生の鶏の絵を加えていることが特徴である。また、2 (14)のルアンナムター県ムンシン郡に住むアカ族で、雷に対して供犠するヤ・ハダの儀礼に用いている。また、2 (15)アカ族も、ヤ・ヌンで用いる鶏は、白が選択される場合（白以外が選択される場合もある）は必ず雄でなければならないといい、雄という意識が強く働いている。

8番目に、色、雌雄ともに問わずに用いている例は、2 (11)のルアンナムター県ナーレー郡のター側沿いにすむカム族である。

次に、犬を用いる例を見てみたい。一つは、2 (13)のルアンナムター県ナムター郡チャルンスツ村のカムクエン族で、黒い犬を黒い鶏とともに供犠をしている。ここで注目しておかなければならないことは、犬はもちろぬ鶏も白色を忌避する意識が明確に認められることである。また、2 (8)のウドムサイ県ムンサイ郡に住むカム族で、最初の年に牛を供犠するプア・ロイ・ムアンを行い、その翌年に黒い犬を供犠するハルンの二つの儀礼を連続して行い、3年間隔を置いて繰り返すという形を取っている。ここでも白色に対する忌避の意識が強く見られる。さらに、プア・ロイ・ムアンの場合は、集落外から迎えられた長老が司祭を務め、ハルンの場合は集落内の長老が司祭を務めるというように、牛よりも犬の方が小規模の意識が認められる。

しかし、2 (4)のウドムサイ県ムンガー郡のガー川上流にすむカム族の場合は、白い雄の犬を白い雄の鶏とともに供犠しており、黒い雌の犬も鶏も霊が受け取らないとしており、先の2例とは逆の考え方を示している。

次に、豚を用いる例をみてみたい。この例は、2 (12)のルアンナムター県ナーレー郡のター側沿いにすむカム族である。ここでは、黒白の色について聞き書きしていないが黒であると考えてよいであろう。

さらに、牛を供犠の対象としているのは、2 (8)のウドムサイ県ムンサイ郡に住むカム族で、最初の年に牛を供犠するプア・ロイ・ムアンを行い、その翌年に黒い犬を供犠するハルンの二つの儀礼を連続して行い、3年間隔を置いて繰り返すという形を取っている。また、プア・ロイ・ムアンの場合は、集落外から迎えられた長老が司祭を務め、ハルンの場合は集落内の長老が司祭を務めるというように、犬よりも牛の方が小規模の意識が認められる。

動物を供犠する対象

成育促進儀礼における供犠は、一体誰に向かって行われているのであるかということについてみてみたい。

まず、最も多く認められるのは、2 (1)のルアンパバーン県ナムパーク郡のガー川流域に住むカム族、2 (5)(7)などのウドムサイ県ムンガー、ムンサイ郡のガー川上流にすむカム族(8)のウドムサイ県ムンサイ郡ナムレー村のカム族、2 (11)のルアンナムター県ナーレー郡のター側沿いにすむカム族、2 (13)のルアンナムター県ナムター郡に住むカムクエン族、2 (14)(15)などのルアンナムター県ムンシン郡に住むアカ族などに見られる、山や畑にいて稲に対して悪さを行う霊に動物の生血や調理した肉を食べさせ、悪さをしないようにもてなし、満足させて畑から出て遠くへ立ち退いてもらい、再び畑に入らないようにしようという意識であろう。

次に、2 (13)のルアンナムター県ナムター郡に住むカムクエン族のハフソルの儀礼に見られる、悪い霊に動物の生血や調理した肉を食べさせ、そのことを通して食害を及ぼしている鼠の行為を止めさせてもらおうとする意識である。

さらに、2 (2)(4)(6)のルアンパバーン県ムンゴイ郡のウー川流域に住むカム族の間には、食害をもたらす鼠、白蟻、猪、野生の鶏などの野生の動物の動物に、供犠した動物の生血や調理した肉を食べさせ、もてなし、それらの動物に畑から出ていってもらい、再び入らないようにしようとする意識である。

また、2 (12)のルアンナムター県ナーレー郡のター側沿いにすむカム族の場合には、稲を生みだし豊作をもたらすラマン(稲の魂)に対して、供犠した動物の生血や調理した肉を食べさせ、もてなして、稲の稔りを願う意識も認められる。この意識は、同じター川沿いに住む2 (12)のカム族の中にも伺える。

さらに、2 (14)のルアンナムター県ムンシン郡に住むアカ族のヤ・ハダ(畑・雷)の儀礼に見られるように、雷の害を除去しようとするアカ族に特有と思われるような例も認められる。

以上がラオス北部、ルアンパバーン県、ウドムサイ県、ルアンナムター県における成育促進儀礼の動物供犠の様相である。供犠される動物のうち鶏が大きな比重を占めていることがわかる。しかも、白色以外の鶏が選択されている例が多いことも指摘できよう。その理由として、白い色は霊が受け取らないとすることをあげている。もちろんその逆に、白い入りを選択する例も少数派ではあるが、存在することも事実として指摘しておかなければならない。白以外の色、特に赤、黒の色についてはさらに事例を積み重ねていく必要がある。また、供犠される動物が野生ではなく、家畜であることも共通することも指摘できる。

さらに、儀礼の最後に畑の出入り口を封鎖することも特徴であり、その際にタレオと呼ばれる六つ目編みの竹の編み物に生血であるとか、羽であるとかを付けることもその特徴として指摘できる。

また、2 (15)のルアンナムター県ムンシン郡に住むアカ族のヤ・ヌンで供犠された鶏の肉を例外として、ほとんどがその場で食い尽くされるというのも、供犠の特徴としてあげておこう。

それにしても、同じ成育促進儀礼の動物供犠といっても、簡単に「カム族では」と一括りにできないことに改めて気づかされる。民族内における多様性の問題を考える必要も出てくると思われる。ただ、こうした事例を積み重ねていくしかその道が開けないことも事実である。

しかし、こうした霊に対する意識とそれを土台にした儀礼も、農薬や化学肥料等の普及が受け入れられるに従って消滅していくに違いない。ただ、そうした霊に対する意識と儀礼の実態の中に、深く生きている人と自然の付き合い方の思想を消滅させるわけにはいくまい。そのためにも、さらなる調査を積み重ねていくしかない。

Abstract:

The focus of this report is on the two kinds of rice farming rituals practiced among the shifting cultivators of northern Laos. One kind is to prevent diseases of rice. Another is to cure diseased rice. A proper domestic animal should be killed in the ritual. It is an offering to the evil spirits or mice which do harm to rice. The ritual aims to enhance the growth of rice and good harvest.